

内村鑑三とその時代 (5)
—内村の無教会主義対植村の教会主義—

古賀敬太*

Kanzo Uchimura and His Time (5)
— Uchimura's Non-Churchism versus Uemura's
Ecclesiasticism —

Keita Koga*

Abstract

This article deals with the formation of Uchimura's Non-Churchism (=無教会主義) from 1901 to his death in 1930 and also clarifies its significance and influence on Christianity.

Uchimura's features of Non-Churchism consists in Biblical infallibility, a creed of redemption, resurrection and the Second Coming of Jesus Christ, anti-clericalism, laicism, anti-ritualism and anti-institutional church. Uchimura's Non-Churchism had a strong impact on the Japanese protestant churches and also incurred strong opposition.

Especially Masahisa Uemura – a most influential protestant leader – objected to Non-Churchism and regarded it as anarchism and extreme individualism in Christianity. He insisted on the importance of institutional church and devoted to establish national church.

Although the two christian leader's concept of the church seems in opposition, the two have some commonality, that is the spiritual truth of the body of Christ, the guidance of Holy Spirit and the common fellowship of brothers and sisters in Christ.

While Uchimura regarded the institutional church and clericalism as incompatible with the truth of the invisible church, Uemura promoted the unification of various denominations and tried to establish the Kingdom of God in Japan on the basis of protestant churches. On the other hand, Uchimura was sure that the fulfillment of the Kingdom of God would become possible only with the Second Coming of Jesus Christ.

* こが けいた : 大阪国際大学名誉教授 (2022. 9. 16 受理)

キーワード

無教会主義、洗礼・聖餐、福音、聖職者主義、教会合同、日本基督教会

Key Words

Non-Churchism Baptism & Sacraments, Gospel, Ordinariate,
Unification of Churches

はじめに

内村鑑三の無教会論はなぜ生まれて来たのか。その特徴と意義はどこにあるのか。また当時のプロテスタント教会を代表する植村正久の教会論はどのようなものであったのか。一般に内村の無教会主義と植村の教会主義は水と油のように評価されるが、本当にそうなのか。本稿は、内村の無教会主義と植村の教会主義を跡づけることによって、両者の共通点と相違点を明らかにすることとする。また両者が日本のプロテスタント教会史に及ぼした影響について検討することにする。

I 内村の無教会論の形成

1 内村の無教会主義の三段階

関根正雄は、『内村鑑三』（清水書院、1988年）において、内村の伝道活動を五期に区分している。¹⁾

第一期 角筈時代（1899年7月－1907年11月）

内村がキリスト教独立伝道者として立ち、1900年に『聖書之研究』を始め、角筈の自宅で聖書講義を行う時期。1905年に親睦団体として全国に「教友会」が組織される。

第二期 柏木時代（前期）（1907年11月－1917年12月）

1913年今井館で聖書講堂が増築され、『聖書之研究』の読者に聖書講義が行われる。

第三期 神田青年会館時代（再臨提唱の時期、1918年1月－1919年5月）

この時に「教友会」、「エマオ会」、「白雨会」が発展的に解消して「柏木兄弟団」が結成される。

第四期 大手町私立衛生会館時代（1919年6月－1923年9月）

この時に「ロマ書」（60回）が講演された。1923年の関東大震災の時に、大手町私立衛生会館が焼失した。

第五期 柏木時代（後期）（1923年9月－1930年3月）

今井館に戻り、聖書講義を継続

この内村の伝道活動の五つの区分を参考に、内村の無教会論の主張を三つの時期にわけ

て考えることにする。

第一期は、内村が公に無教会を提唱し始める角筈時代であり、1900年に「聖書之研究」を始めた時である。第二期は、内村の教会攻撃が最も激しくなる神田青年会館時代で、内村が再臨運動を展開した時期である。組合教会や日本基督教会は再臨運動に否定的であったため、教会との対立が激しくなった時である。第三期は、こうした対決が下火に向かい、教会に対する配慮が生まれる柏木時代である。

以上三つの時期に分けて、内村の無教会主義の特徴を跡づけることにする。

1.1 無教会の原型－札幌独立教会

内村鑑三の無教会論の走りは、札幌独立教会の建設に求められる。内村が札幌農学校で学んでいた頃、札幌にはイギリス聖公会の伝道所とアメリカのメソジスト教会があった。内村たちはメソジスト教会のハリス宣教師からバプテスマを受けたが、独自にいかなる教派にも属さない札幌独立教会を建設した。札幌独立教会の特徴は、反教派主義、反聖職者主義、平信徒中心主義、反儀式主義であり、それは後の内村の無教会主義のモデルをなしていた。この点について政池仁は、『内村鑑三伝』において、以下のように述べている。

「クラークという全くの平信徒が、学生たちに信仰を伝えて去り、その学生たちが下級生にそれを伝え、こうしてできた全くの平信徒ばかりで、ここに札幌基督教会は完全に独立した。そして、『教会に祭司は不要である』という無教会主義の第一歩がここに始まった。」²⁾

内村自身も、博学な聖書知識を持ち、熱心に伝道したが、接手礼を受けて牧師になることはなく、生涯平信徒で通した。

1.2 内村の無教会論－第一期

政池仁によれば、内村が、無教会主義を実質的に主張したのは、『宗教座談』（1900年）であると言う。³⁾内村は、教会が社交の場となり、罪惡の救済力に欠けている点に、教会の問題点を指摘した。

「私が、今日我が国にある基督教会なるものに入出入りせざるの理由は、私が寄席や劇場に一切出入致さないとの同一の理由でございます。即ち今の教会なるものは、道徳的に私を害するものと信ずるからであります。……私が当今のキリスト教会なるものを嫌う主なる理由は、それが罪惡の救済力に欠乏しているからでございます。即ち教会たるものの天職を忘れて交際上的一种、あるいは慈善クラブの一种か、然らざれば教法国の一种となっているからであります。」（『内村鑑三全集』⑧-120-121）

内村にとって、教会が社交の場となり、「罪惡の救済力に欠乏している」のは、キリストの十字架と復活という福音が語られていないからであった。内村は、「私には私の出席すべき教会はありません。私は実にこの世においては無教会信者の一人で御座います」（⑧-119）と述べている。内村にとって教会は第一義的に「心靈上の罪人を救う場所」であった。内村は教会そのものを批判したのではなく、教会に福音がなく、救済力に欠乏していることを憂えたのである。

彼は、1901年3月に「無教会」というパンフレットを発行した。そこには以下のように記されている。

「『無教会』は、教会のない者の教会であります。すなわち家のない者の合宿所と云うべきものであります。すなわち心霊上の養育院とか孤児院のようなものであります。『無教会』の無の字は『ナイ』と読むべきものでありまして、『無にする』とか『無視する』とか云う意味ではありません…」(同、⑨-71)

ここでは、無教会は、教会を無視するとか、無にするという対決的なものではなく、教会に満足できず離れてくる魂の養育院ないし孤児院であるという位置づけである。内村は、決して教会は必要でなく、個人が一人で神と交わっていればよいと考えたわけではない、既成の教会から霊的渴きをもって離れてくる人たちを受け容れ、霊的に養うのが無教会であった。このように内村の無教会主義は、教会を無視するという対決的なものではなく、教会に真理を見出し得ない人の避難所であった。

彼は、1905年7月5日に、ベル宛て書簡において、無教会論の真の目的とする所について、以下のように述べている。

「二十年間にわたる経験は、人の靈魂は教会と、信条と、儀式と、宣教師がなくとも救われ得ることを、私にかたく信じさせてくれました。聖書と聖霊とがすべてをなしたまいます。私は、最高の尊厳は、平信徒に与えられていると信じます。」(『内村鑑三日記書簡全集』⑥-103)

ここで内村は、洗礼や聖餐式といった儀式に対する批判、そして聖職者や宣教師の教会に対して平信徒の教会を主張している。ここでの内村の無教会主義は、反聖職者主義、平信徒主義である。

関根正夫は、無教会が教派化する危険性を内村は極力回避しようとしたとし、決して無教会は反教会ではなかったと以下のように述べている。

「内村は無教会主義を唱道したとはいえ、決して教派的な活動に墮することなく、教派を超えて、真正の教会の実現に努力した。また各所の教会で講演し、説教し、日本の教会の独立のために力を貸したのである。」⁴⁾

内村はこの第一期においては、完全に他の教会との交わりを断ったわけではなく、1905年5月に長崎の池田福司に宛てた書簡においては、「植村正久、小崎弘道の両氏と共働して聖書改訳に従事致し候。」(『日記書簡全集』⑥-99)と述べている。ただ内村は、『聖書之研究』を発行する以前は、組合系の『六合雑誌』や植村正久主筆の『福音新報』にしばしば執筆していたが、『聖書之研究』発刊以降は、他の基督教雑誌に寄稿することはほとんどなくなった。

1.3 第二期

すでに述べたように内村の教会批判が過激になるのは、再臨運動を始める1918年からである。ここではすでに述べたようにメインストリームの教会に対する批判、そしてその反動として教会側からの内村に対する批判もエスカレートする。この点において内村は以下のように述べている。

「キリスト再臨の信仰は、余の無教会主義を徹底せしむ、この世に勢力を得し教会はすべてキリストの再臨を排斥す。ローマ天主教会を初めとして、英国聖公会、メソジスト教会、バプテスト教会、組合教会、長老日基教会、ことごとくこの信仰を蔑視する。……キリストの再臨を信じて我等は、根本的に教会と異なるに至る。」（『内村鑑三全集』②4-71）

内村は、こうした教会に対する対決姿勢が引き金となり、再臨講演会で使用していた神田青年会館を組合教会の小崎弘道たちによって追い出されている。

1.4 第三期

第三期は、1923年9月1日に関東大震災が発生し、教会・無教会を超えた復興の課題が浮上し、内村も植村もなぜ大震災が東京に起こったかを、信仰の視点から問題にせざるをえなかった。また1924年5月のアメリカの排日移民法案に反対して、6月13日に小崎が牧する赤坂の霊南坂教会で開かれた「キリスト教徒対米問題協議会」において、内村は小崎弘道、植村正久と共に排日移民法案に対する反対演説をし、共同戦線を張っている。このように内村の無教会主義に関する基本的な態度は変化しないまでも、教会に対する激しい批判は緩和されていく。内村は、1924年6月30日の日記において、霊南坂教会にキリスト教徒対米協議会の会合に参加した折、「久しく疎遠の間柄においてありし教会の諸氏が、この際余を歓迎し、彼と行動を共にすることを許せし、彼らのキリスト教的態度に敬服せざるをえない。」（『日記書簡全集』③-62）と教会との関係改善を喜んでいる。キリスト教の伝道や礼拝以外の政治的領域における限定された共同行動ではあるが、内村はキリスト教界における自らの位置を再認識し、キリスト教全体の将来の視点から組合教会や基督教会に対する重荷や責任を抱くことになる。

特に植村が1925年1月8日に召天した後はそうであった。内村は、1925年6月には、青山会館で開かれた日本基督教会主催の都下学生連合礼拝で、日本神学社校長の高倉徳太郎と共に講演している。

2 内村の無教会論の特徴

内村の無教会主義の特徴は一体何であろうか。内村の弟子の矢内原忠雄は、「宣教百年と無教会運動」において無教会主義の八つの特徴をあげている。⁵⁾

第一は、外国ミッションから独立していることである。しかしこれは、内村だけではなく、植村正久や海老名弾正にも共通していえることであった。

第二は、制度的・組織的な教会を造らなかったことである。

第三は、人は信じるだけで救われると強調し、洗礼や聖餐式の sacrament を行わなかったことである。

第四は、神学校を卒業した聖職者中心の教会ではなく、平信徒を中心とする集まりを目指した。

第五は、聖書を重んじ、聖書講義や聖書研究によって、各々の信者が聖書によって直接神から真理を学ぶことを強調した。

第六は、無教会には信仰箇条はないが、「キリストの十字架による罪のあがないと、肉体の復活と、キリストの再臨による神の国の完成を信じること」が根本的信仰であったことである。

第七は、政治的・社会的な問題に関しては、無教会は神のことばを語る預言者的立場に依拠して、政治の腐敗や社会的不正、非戦論を展開した。

第八は、イエス・キリストの純粹な福音を欧米の文化や文明を借りて伝えるのではなく、一般民衆の心に根差すように語ったことである。

こうした矢内原の指摘を参考にして、以下無教会の5つ特質について検討することとする。

3.1 純福音を語る

福音とは一体何か？ 福音 (*εὐαγγέλιον*) とは、エウ (良い) とアングリオン (知らせ) からなっており、good news, 良き知らせを意味している。そして福音は、イエス・キリストの受肉、十字架、復活そして再臨を含んでいる。したがって、内村にとって、この重要な教理を説かない教会は、教会とは言えず、福音を見失っている教会であった。

内村は、『聖書之研究』(1928年3月)に掲載した「教会問題に就いて」において、「今のメソジスト教会には昔の福音的信仰を見ることはできない。私の知る古いメソジスト教会は常に組合教会の反対に立って福音救霊を主張したものであったが、今は然らずしてメソジスト教会は組合教会に能く似寄りたる教会となった」(⑩-125)と述べている。内村にとって、1918年~9年の再臨運動に批判的であった組合教会とメソジスト教会は福音なき教会であった。

実は内村鑑三は札幌農学校時代にメソジストの宣教師ハリス(1846-1921)から1878年に洗礼をうけていた。そしてその後メソジスト教会から離れて、新渡戸稲造や宮部金吾と一緒に札幌独立教会を建設していた。しかし内村によれば、この時のメソジスト教会は十分に福音的であった。内村は、メソジストの宣教師ハリスのみならず、本多庸一(1849-1912)、山路愛山(1865-1917)、高木壬太郎(1864-1921)と親しかった。彼は1921年1月28日の日記において、「青山学院院長、高木壬太郎君の逝去を聞いて悲しんだ。本多庸一君に次いで山路愛山君を失いし日本メソジスト教会の損失、実に大なるというべし。同情に堪えない。」(『内村鑑三日記書簡全集』②-12)と、メソジスト教会の将来に憂慮の念を示している。

内村は組合教会に関しては、最初から今日に至るまで、自由主義神学の影響を受け、十字架と復活の福音が語られていないと考えていた。それは、組合教会の成立のスタートに遡るのである。内村の再臨運動を徹底して批判したのも、熊本バンド出身の海老名弾正であった。

内村は、1921年2月15日の日記において、教義と道徳との関係について触れ、「静かなる読書と黙想の時を持って楽しかった。キリストの先在と受肉と死と復活と昇天と再臨とについて、教えられまた考えた。キリスト教の中心はやはり教義であって、道徳ではない。堅い教義によらずして、強い道徳はない。キリストの受肉、復活、再臨とが無くして、キ

リスト教道徳はその根底よりこわれてしまう。これなくして、信者の社会奉仕も世界改造もあったものではない。」（同、d②-19）と述べている。

3.2 聖書無誤謬論

内村鑑三は、聖書の無誤謬性を否定し、聖書の高等批評を行う新神学を終始一貫して批判してきた。それ故、高等批評を受け入れる教会からは保守的なファンダメンタリストであると批判された。しかし、神の靈感を受けた聖書が、人間の理性によって否定されたり、切り刻まれたりすれば、信仰そのものが解体されてしまう。

この点内村は、1921年8月10日の日記において、以下のように述べている。

「今や世界のキリスト教会は、明白なる二派に分かれつつある。聖書をそのまま神の真理と信じるものと、聖書の中に大真理を見るも、これを『丸呑みにせず』と称する者の二派に分かれる。そうして余も、……前者に属するものである。その点において、われらは教会信者の多数と信仰を異にするものである。われらは聖書信者である。社会奉仕主義者にあらず、世界改造論者にあらず、キリストの受肉と贖罪と、復活と、昇天と再臨を信じる旧式の信者である。」（同、②-82）

内村は、一貫して聖書靈感説を主張し続けたが、特に彼が聖書無誤謬論を展開したのが、1918～1919年に至る再臨運動の時期であった。彼は、1918年9月20日の日記において、当時の教会合同運動について以下の様に批判している。

「聞く、日本におけるキリスト教会の合同は、キリスト再臨ならびに聖書無謬説を信じる者を除外してなされんとしつつありと。まことに結構なことである。かくて余のごときは、もちろん除外せらるるのであって、幸福この上なしである。俗化する今日の教会と合同するは、神と絶縁するにひとしくある。」（同、①-12）

この内村の教会合同批判は、後の植村の教会合同論を考えると、きわめて重要である。基本的な信条の共通性なくして合同を目指しても、たとえ組織力は強化されても、教会の霊的な真理は踏み躪られるという批判である。

彼は、1918年10月2日の日記において、「独立と贖罪と再臨と聖書全部神言節、これらを主張し得ることは何らの恩恵ぞ。」（同、①-17）と述べている。

3.3 教会の世俗化否定

彼が一番嫌ったのは、教会が世俗化して、聖霊の導きを認めず、この世の流れに妥協し、同化していくことであった。それは、教会の霊的死である。

「教会は、常にこの世と主義方針を共にします。この世が戦争を唱えます時には、熱心に戦争を唱えます。この世の輿論は、常に教会の輿論であります。教会はこの世の政治家、実業家、学者等の名をかりてその事業を成さんと致します。しかして私は、イエスの弟子として教会と歩調を共にすることはできません。私は自ら欲するも教会に入りてキリストにおける私の信仰を維持することはできません。私はこの事あるを甚だ悲しみます。然し、止むを得ません。私にとっては良心の声は教会の命よりも重くあります。」（『内村鑑三全集』⑩-92）

内村は、「今や教会には何でもある」（『聖書の研究』142号、1912年5月10日）において、「今や教会には何でもある、音楽もある、交際もある、慈善事業もある、社会改良もある、戦争後の平和論もある、然し唯一ないものがある。それはキリストの福音である。今日の基督教は、基督教ではない。文明教である。」（同、⑲-121）と述べている。

教会は、社会に対する影響力を行使するために、様々な方法で信者を獲得しようとするこの世の手段に頼ろうとする。本来の福音宣教という大目的を見失い、教会を音楽で満ち、豪華な教会堂を建設し、慈善事業を活発に行い、差別撤廃や人権擁護の運動を展開する。それ自体が悪いことではないが、そのことが教会の第一目的となる時に、教会はこの世の組織に変質してしまう。

内村は、慈善事業や社会改革を中心とした教会のありかたを否定した。聖書には、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことで生きる。」（マタイ4：4）とあるので、パンの問題を否定したわけではないが、神の言葉を語ることを優先したのである。⁶⁾

3.4 聖礼典の否定

内村は基督教の二大儀式である洗礼と聖餐式に対して否定的であったと言われる。正確に言えば、救いの条件としての洗礼と聖餐式を否定したのである。洗礼と聖餐式は聖職者が執行するので、聖職者なくして、あるいは教会なくして救いはないことになる。然し内村は、教会の外にも救いはありと主張した。

洗礼・聖餐の問題に関して、内村は、1901年2月号の『聖書之研究』に「洗礼晩餐廃止論」を寄稿した。

「……余は、洗礼晩餐の両式を以って救霊上の必要とは信じる能わず。……然れども余は此の両式を蔑視する者にあらず、否な反って余は之れに対して非常の尊敬を表すものなり、洗礼は基督御自身がバプテスマのヨハネより授かり給いし式として、晩餐は基督受難の記念として余は其の非常に美はしき式なるを知る。……然れども若し人ありて水の洗礼を受けず、教会の晩餐会に列なるにあらざれば余は救われざるべしと云う者あれば、余は余の聖書に従って余の精神的自由を唱え、かくのごとき説に服従せざらんとす。われらは、信仰に由て救わる、行為（儀式的）に由て救わるるにあらず。之れに与かるは可し、与らざるも可し、要は十字架に釘けられし神の子の罪贖を信じるにあり、其他の事は細事のみ。」（同、⑨-53）

また彼は1922年9月27日の日記において、以下のように述べている。

「人が救われんがためにはバプテスマと聖餐とを受くるの必要があるというのがときは、それこそ古い説であって、新しい聖書研究は明白にこれを否定するのである。新神学によって毀たれるものは教会であって、福音ではない。」（②-227）

上述したように内村は、洗礼や聖餐式が救いの条件として主張される時には、反対したが、そうでない場合には、許容した。たしかに、内村は、無教会においてバプテスマと聖餐式をほとんど行わなかったが、全面否定したわけではない。彼は1922年2月5日の日記において、「余は、バプテスマをもって救霊上必要条件とは認めない。しかしながら有益と

認める場合においてはこれを行うに躊躇しない。」（『内村鑑三日記書簡全集』②-148）と述べ、長女ルツ子を含め、過去四回バプテスマを施したと述べている。

この点に関して山本泰次郎は、『内村鑑三の根本問題』において、「内村の無教会主義は、洗礼、聖餐等の礼典を無視し、或いは否定する無洗礼主義、無聖餐主義ではなかったということす」⁷⁾と述べている。とはいえ、洗礼や聖餐式に対する積極的な評価は見当たらず、やはり聖礼典を批判的に位置付けていることは変わりがない。内村にとって洗礼・聖餐問題は「細事」であったが、無教会の本質が洗礼・聖餐式の否定とみなされるようになったのは、不幸であった。

3.5 霊的な人格共同体としての教会

内村は、1907年3月10日の『聖書之研究』（85号）に「無教会主義の前進」という論稿を発表し、彼の積極的な教会観を呈示している。彼は組織的・儀式的・聖職者中心主義の教会には反対であったが、霊的な教会には賛成であった。

「無教会は、進んで、有教会となるべきである。然し在来の教会に還るべきではない。教会ならざる教会となるべきである、即ち教会を要せざる者の霊的団体となるべきである。……無教会主義はその一面においては結晶せる教会の破壊である。他の一面においては、生ける教会の建設である。而うして無教会が結晶してまたいわゆる教会となる時には、無教会主義を以て之を壊すべきである。……無教会主義であれば決して放埒に流れてはならない。我等は外形の儀式は之を軽んずるも福音の精要には固く縛る（すがる）べきである。」（『内村鑑三全集』⑭-489～90）

また内村は、1906年4月10日『新希望』（74号）の「福音とは何ぞ」における小見出し「新教会」において以下のように述べている。ここに既成の教会とは対照的な彼の理想的な教会像がある。それは聖職者中心の制度的教会を排除した霊的な教会であり、平信徒中心の教会であった。

「監督なし、牧師なし、伝道師なし、洗礼なし、聖餐式なし、按手礼なし、楽器と教壇とを備えたる教会なし、神あり、キリストあり、聖霊あり、神と人とを愛する心あり、その教会堂、上に蒼穹を張り、下に青草を布きたる天然なり、その礼拝式は、日々の労働なり、その音楽は聖霊に感じたる時の感謝の祈禱なり、その憲法は聖書なり、その監督はキリストなり、而してその会員は霊と真とを以て神を拝する世界万国の兄弟姉妹なり、我等は永久にこの教会に忠実なる会員たらんと欲す。」（同、⑭-66）

内村の無教会主義は制度的教会を否定し、独りで神と交わることを奨励する個人主義のきわめつけであると批判する人々もいる。内村の説明では、そのように誤解される表現も多い。しかし彼は聖書に示されている真のエクレスシアを再興することを望んで居た。彼は、キリストに連なる霊的いのちの共同体を再興しようとしたのであり、制度的・組織的教会はその障害になると考えたのである。彼は、ルターやカルヴァンが途中で挫折した宗教改革を徹底させ、真のエクレスシアを形成しようと試みた。彼は、「私は、ルーテルやカルヴァンがカトリック教会に反対した精神を以て今日のプロテスタント教会に反対するものである。私は、プロテスタント教会が未だ全く脱却しえぬカトリック主義より、全然脱却せ

んと欲する者である。」(同、③①-135)と述べている。

また内村は、「宗教改革仕直しの必要」において、あるべき教会の姿として、「制度ならずして親交であり、組織又は団体に非ずして、靈魂の自由なる交際であらねばならぬ。實際的に言えば、それは神の子イエス・キリストならぬ何人をも監督または牧師と呼ばざる、教会を要せざる基督教であらねばならぬ。」(同、③①-133)と述べている。

内村のエクレシア観は十全に展開されるにはいたらなかったが、彼が制度的教会を排斥したものの、靈的エクレシアにおけるクリスチャンの交わりを強調したことは、看過すべきではない。したがって、内村は、まず誤った既成の制度的な教会を脱構築した後に、聖書に依拠した理想的な靈の共同体を設立することを望んだといえよう。

4 内村鑑三と塚本虎二

内村の無教会主義は、弟子たちには、無教会主義そのものが真理とみなされ、いわば教派化されていく危険性が存在した。そのことを最も典型的に示しているのが、塚本虎二である。

塚本虎二(1885-1973)は、第一高等学校に入学し、内村鑑三の『基督教問答』を読み、感動し、『聖書之研究』を読み始め、内村の聖書研究会の柏会に入会し、1919年に農商務省を辞めて後、独立伝道者となった。

実は塚本虎二は、内村の弟子の中では、最も教会との結びつきが強い弟子であった。塚本虎二の「無教会になるまで」によれば、1921年に塚本が結婚した奥さんは、日本基督教富士見町教会の牧師植村正久の弟子であり、またその母親は富士見町教会の長老をしていた。この結婚を契機として塚本と富士見町教会との関係は強くなり、内村鑑三は、「塚本は一体おれの弟子か植村の弟子か」と言っていたという。⁸⁾塚本が、徹底した無教会主義者となるのは、1928年頃である。塚本はこの点において、以下のように述べている。

「教会に対する私の態度はいよいよはっきりしてきた。『聖書之研究』誌上の論文は、無教會的、反教會的となり、昭和三年頃には、その極に達した。毎号毎号教会攻撃の論文が続いた。ことに教会問題でカトリックを怒らせ、司祭岩下壯一君が立って私の議論を反駁した。こと面倒と見て私は逃げてしまったけれども、岩下君はその機関誌で毎号のように私の無教会主義を攻撃した。……また内村先生は、狂える獅子のように私が教会にかみつくの黙って見ておられたが、昭和三年【1928年】に『無教会主義とは何ぞや』という論文を書いた時には、さすがにみかねたらしく、たくさん付箋をつけて、あまりひどいから書き直すようにとのことであった。私は涙を流して争ったが、遂に譲って、烈しい文句をすこしく穏やかに書き直した。」⁹⁾

上述したように、塚本虎二は、1928年、『聖書之研究』誌(338～340号)に「無教会主義とは何ぞや」を寄稿した。これに対して内村は、問題の箇所付箋とコメントをつけている。その一部だけ紹介する。

「Either-orとするまでの問題ではないと思います。今は三十年前とはだいぶちがいます。今や、教会と死を賭して争うべきではなく、彼らの友となりて導いてやるべきであると思います。……私と『聖研』とは今日まで無教会主義を第二問題として扱って来た

のであります。第一問題としてではありません。之を第一問題として扱う以上は、私共の陣容を変えずばならず、随分の大問題であります。」（『内村鑑三目録』⑫-263）
内村にとって、無教会は教会を批判し、戦うのではなくて、友となって導く時代に入っていた。内村は1928年9月30日黒崎幸吉宛ての書簡にて、同じ認識を示している。

「無教会論が今に至って復興してきて、少しく困りました。今は二十年前とは異なり、教会を責めるのは少しく大人気ないと思います。今日我等に敵する者はありません。今より後は彼等を建ててやりたいと思います。」（『日記書簡全集』⑧-263~4）

内村の教会に対する姿勢の転換、教会に対する好意的態度は、『聖書之研究』（1928年10月10日）に寄稿した「積極的無教会主義」にも、見ることができる。

「私はすべての人が私の如くに無教会信者であらねばならぬとは信じない。私の無教会主義が私を救うのであるとは思はない。私は教会問題は基督教の根本問題であるとは信じない。私は人に私の無教会信者であることを容（ゆる）して貰いたいように、私は人がその欲する教会にいることを容す。……のみならず私は教会を助くるに躊躇しない。勿論その教会が私の無教会主義を尊重してくれることを要求する。……私は教会の信仰と私のそれとの間に存する共通の信仰に就て語る。」（『内村鑑三全集』⑩-283~4）

内村にとって第一義的に重要なのは福音であって、無教会主義は福音が全うされていくための手段であった。教会が本来の福音的な教会になればなるほど、協力できたのである。内村は遺稿となった「私は無教会主義を…」の中で、「私は今日流行の無教会主義者にあらずと。……私は教会問題には無頓着なる程度の無教会主義者である」（⑫-348）と述べ、「教会は腐っても、聖霊は未だ全く其内より去り給はない。そして私は其内に留まり給う聖霊の故に教会を尊敬せざるを得ないのである」（⑫-348）と教会への積極的な思いを表明している。

これに対して、内村の弟子たちにとっては、まさに無教会主義があたかも真理であるかのように絶対化され、教派化していくことになる。¹⁰⁾

塚本は、1930年『聖書知識』を創刊したが、表紙の大上段にEXTRA ECCLESIAM SALUS（教会の外に救いあり）と記されている。これは、ラテン教父のキプリアヌスの言葉EXTRA ECCLESIAM NULLASALUS（教会の外に救いなし）に対立する標語である。

II 植村正久の教会論

植村正久は、1873年に横浜の日本基督公会で宣教師バラから洗礼を受け、ブラウン塾で聖書を学んでいる。1879年に下谷一致教会を建て上げ、翌年牧師に就任し、1882年に会堂が完成した。彼は、1887年に一番町教会を設立、後に富士見町教会（1906年）に改称した。彼は、海老名弾正との神学的論争を通じて正統的な福音神学を確立すると同時に、制度的教会の確立と教会合同を積極的に進めていった。植村が1925年に永眠した時の肩書は、富士見町教会初代牧師、大会伝道局理事長、東京神学社校長、『福音新報』主筆であった。彼は、教会の伝道活動を通して、日本を救済しようとした愛国主義者であった。

1 植村の教会論の特徴

内村が批判した制度的教会の中心人物は、植村正久であった。それでは、植村は、どのような教会論を展開したのであろうか。また彼は無教会に対してどのような評価を持って居たのであろうか。以下、植村が目指した教会の特徴を6点紹介することにする。

内村は、1900年に『聖書之研究』を出す前は、植村の『福音新報』にしばしば寄稿した。もともと二人はお互いに相容れない性格であったが、内村が無教会主義を主張し出すと、教会主義を主張する植村とは関係は一層悪化した。この点に関して政池は、「植村は組織的教会を作ることに熱心であり、内村は愛のエクレスシアを作ることに熱心であった。内村と植村とは正統的信仰という点においては、一致していたが、教会問題においては対蹠的であり——」¹¹⁾と述べている。植村が、愛のエクレスシアを形成することをしなかったかは、論議の余地があるが、組織的な制度的教会の重視はその通りである。

1.1 自由教会

植村が目指した教会とは、「自由教会」であった。自由教会とは、特に国家との関係において、国家権力の干渉や侵害から自由な教会を目指した。当然そこからは国家権力と結びつく国教会の否定が帰結し、信教の自由や教会の自治の要求が生まれてくる。彼は、「信教自由の大義を明らかにし、教会自治の権利を主張し、毫もこれを侵害せられざるよう細心注意するは、キリスト教徒にとりて安全の道なるのみならず、国家の進歩、人心発達のためにも甚だ必要なるべしと信ず。」(『植村正久著作集』⑥-22)と国家から自由な教会の意義を論じている。

不敬事件の対応にもみられるように、植村正久率いる日本基督教会は、組合教会、更には当事者の内村鑑三よりも、当局に対する批判は強かった。植村の反権力の姿勢は内村と同様徹底していた。植村は「自由教会」の定義として、「ただキリストのみを首領と認め、国家の抑圧、支配以外に立ちて、キリストの法律を解釈し、これを執行する権利を運用する教会すなわちこれなり。」(同、⑥-23)と定義している。

植村は、政府によって議会の付託された宗教法案の問題点を「宗教法案に付きて」(福音新報237号、1900年1月10日)において以下のように列挙している。

第一に植村は、「勅令をもって教師の資格を定ぶべし」の条項を教会自治への侵害と批判する。

第二に集会を行うことを事前に行政府に届け出することを定めた第8条を批判する。

第三に彼は、法案の37条で、「宣教に従事」するものをして政治上の意見を發表し、その他政治上の運動をなさしめずという規定を批判する。この点に関して植村は、旧約の預言者の事例を取り上げて、以下のように述べている。

「それキリスト教の宣教は、旧約時代の予言者のごときものなり。しこうして国の事に付きて神の聖旨を宣言するは、予言の一大要旨なり。今日の基督教伝道者また然り。時ありて国家の運命、政界の趨勢動作に付き、神の聖旨を説きて、世を啓導し、人を警戒するところなかるべからず。真正の伝道者ならばこれを言わずして政治上の意見を發表するところなくんば、時としては天に対して曠職の罪免れ難きものあらんとす。

米国の南北戦争に際し、ブッシュネル、チャニング、ピーチャー等が教師としていかなることをなせしかを考えなば、キリスト教宣教師をして政治上に口を噤ましむるの損害国家のために多大なるを知り易かるべし。社会改良も時としてはこれを政治上の問題とせざれば、仏造りて魂を入れざる類となりおわるべし。」（同、⑥-28）

まさに植村の見解は、国家に対する預言者の批判的役割を重視した内村と共通した点があった。しかし植村にとって、預言者的役割を果たすためにも制度的教会は必要であった。

1.2 自主・独立の教会

植村はまた、外国の宣教団体に対して、日本の教会が財政的にも、教会形成においても自主独立であるべきことを強調した。したがって、自由教会の自由とは国家にたいすると同様に、外国の宣教団体に対する自由を意味していた。内村もまた外国の宣教師に依存して伝道することを批判した。この点において彼らは、一致しており、共に愛国主義者であった。

1905年の日本基督教会の第19回大会においては、ミッションによって援助を受け、独立自給していない教会を伝道教会と呼び、今後は独立自給できていない教会を教会とみなさないことを決定している。植村は、「独立問題に対する諸教派の態度」（『福音新報』112号、1897年8月20日）において、「監督教会、メソジスト教会等のごときは、皆外国の伝道会社と徹頭徹尾十分に結託し、否これに附随して事をなさんとするものなり。」（⑥-19）と批判する一方、組合教会においては、「教会のうちに自給しつつあるものと、外国伝道者より補助を受けるものとを嚴重に區別し」、前者においても総会における投票を認めることが進んでいることを評価している。（⑥-17）そのことが、純然たる日本の独立教会を建設する道であった。組合教会の母体であった熊本バンドは、元来愛国主義的で、外国の宣教団体とは距離を置いていたので、植村にとって組合教会との合同は可能であった。

植村は1897年に教会の財政的基盤という観点から「キリスト教会の三潮流」において基督教会を三つに区別している。第一の潮流は、政治家や実業家と結び、彼等の支援や寄付を受けて伝道を行う「俗界依存派」である。第二の潮流は、外国の教友と結び、その力を藉りて事をともになさんと欲する「外国依存派」、第三の潮流は、日本の基督教徒の伝道を中心とする「自主独立派」である。この最後の潮流は、「キリストの十字架」の外は知るまじとの決心堅く、……一直線に正真のキリスト教を宣べ伝えることを主張する。（『植村正久著作集』②-91）当然植村は、「自主独立派」で「外国依存派」を「宗教上の寄生虫」として批判し、また政治家と実業家と結託した「俗界依存派」を攻撃した。例えば植村は、政治家や実業家の援助のもとに行われた「世界日曜学校大会」を以下のように批判する。

「1920年大隈重信や渋沢栄一の援助の下に、1920年に世界日曜学校大会が開催された折、わがキリストを措きて、世の智術、趣味、威力、金権、門地等に阿附し、これを迎合し、これと結託してその道を伝え、その計画を実現せしめんと図る者もある如くに見受けらる。……世界日曜学校大会が Patron's association（大隈、渋沢、その他の人々の組織せる愛顧して引き立つる連中の団体を意味す）なるものを有するもキリスト者の精神状態における何者かを暗示するものではあるまいか」（『植村正久全集』③-287）

「外国依存派」や「俗界依存派」を斥け、「自主独立派」でキリストの十字架のみを宣べ伝える点では、植村も内村鑑三と同じであった。内村は1920年10月14日の日記で、大隈重信や渋沢栄一の後援によって開催された世界日曜学校大会に反対し、以下のように批判している。

「かかる反対は、わが国においてキリスト教の純潔を維持するために必要である。不信者の後援によりてキリスト教的大会を開きしことについて、キリスト信者中、一人の非難の声を揚ぐる者なしとありては、世界と後世とに対し、大正時代の日本キリスト教の恥辱である。」(『内村鑑三日記書簡全集』①-309)

植村や内村は、「俗界依存」を批判し、信仰の純粋性を貫く点において、くすしくも一致している。これと対象的なのが新島襄であった。植村も内村も、新島襄が同志社英学校を建設するために、外国ミッションの資金援助や政治家・実業家の資金集めに奔走することに批判的であった。植村は、「事業上の必要は、彼【新島襄】を駆って、非キリスト教勢力を抱合し、これを利用せんと汲々たらしめた。彼は世間の政治家や財産家も利用し、外国の宗派とその勢力を自家葉籠中のものとなし、己の理想を実行せんと試みた。」(『植村全集』⑦-531)と痛烈に批判している。

植村は、また日本の教会の財政的独立のみならず、教会の牧会的・統治体制の独立をも目指した。更に彼は、伝道者の養成や教会が依って立つ神学が、外国の教会や宣教師団から独立することを主張し、その為に明治学院神学部講師を辞任し、1904年「東京神学社」(後の東京神学大学)を創設したのである。

1.3 教会と社会活動

植村は、政治権力に対して預言者的な警告の役割を演じると同時に、社会事業の働きを否定しなかった。彼の牧する富士見町教会には、日本YMCAの創設者で刑務所伝道で有名なカナダの宣教師キャロライン・マクドナルド(1874-1931)が長老として在籍していたし、自由学園を始めた羽仁もと子(1873-1957)・吉一夫妻も富士見町教会に通い、植村も、「自由学園」の基督教教育を助けていた。また植村は、山室軍平(1872-1940)率いる救世軍の慈善活動をも支援している。

彼は、「キリスト者と社会事業」(『福音新報』1385号、1922, 1, 20)という死の一年前の論文において、キリスト者が社会事業に無関心であるという批判に対して反論している。社会事業とは、世界の平和、軍備の撤廃もしくは縮小、労資の関係、窮民の賑恤【生活支援】、犯罪者の救済、その他矯風廓清などであるとし、こうしたことを等閑視することは、「キリストの道にはずれる。天下の憂いを憂え、国の難局や社会の疾患を心に懸けて、その処置に力を致すがキリスト者の責任であろう」(『植村正久著作集』①-387)と述べている。とはいえ、植村は、教会が社会事業を全面的に行う事には反対であった。

彼は教会の礼拝や説教は主に純宗教的であるべきで、社会問題に占領されるべきではないこと、教会の第一義的な使命は、神の言葉を宣べ伝えることにあることを強調した。彼は、「もしもパウロが、これらの人々のように奴隷問題や政治の事、さては婦人問題などにあまり多く力を入れたならばどうという結果になったであろうか。」と述べている。

しかし彼は、「日本のキリスト者ほど社会の問題に関心し、努力して居るものは、国民の中、他にはあるまい」（同、①-388）と述べ、キリスト者が社会事業に無関心であるという批判に反論している。植村には、社会事業に対する燃えるが如き熱情があったが、教会は第一義的に礼拝とみことばの宣教にあるという彼の確信は変わらなかった。

1.4 教派の否定と教会合同—国民教会の形成

上述したように内村と植村との間には、意外と教会観において一致することも多い。ただ、教会の制度化、超教派的な教会の合同による国民教会の形成という一点においては、内村と植村は、水と油のような存在であった。

教会合同の試みは、1870年代から試みられ、植村も積極的に奨励した。1872年に設立された日本基督教会は、その条例において「我輩の公会は宗派に属せず」と宣言していた。教派を超えた教会合同は、時流に乗っていくように思われ、最初に1877年に改革派と長老派の諸公会が合同し、日本基督一致教会が成立した。更にキリスト教会と組合教会の合同が1886年頃から試みられたが、1889年に会衆主義に固執する新島襄の反対によって挫折した。この後一致教会は、日本基督教会と改称する。大正時代においては、1912年に結成された超教派の組織「日本基督教同盟」を中心に合同が模索された。加盟教会は、日本基督教会、組合教会、メソジスト教会など8教派で、会長に本多庸一、副会長に小崎弘道が就任し、YMCA、日本日曜学校協会、日本基督教婦人矯風会なども参加し「日本基督教同盟」は、教会や団体の連絡協力機関として機能し、1913年から1916年まで超教派の全国協同伝道を行った。¹²⁾ここで中心的働きをしたのは、日本基督教会の植村正久や井深梶之助、メソジスト教会の本多庸一、組合教会の小崎弘道、宮川経輝であった。この日本基督教同盟は1923年には「日本基督教聯盟」に発展的に解消され、この組織が1941年の日本基督教団の成立の土台をなしていく。

植村も合同の基礎としての信条の一致を重視しており、「真正の合同は精神上近く、主義も同じく打って一丸となすに最も好都合の間に企てられるべきものであり」（『植村正久著作集』⑥-53）、ユニテリアン（三位一体やイエスの神性を否定する教派）までウイングを広げて、合同を企てることは砂上の楼閣であると指摘していた。植村が合同で念頭に置いていたのは、日本基督教会、組合教会そしてメソジスト教会であったが、組合教会に絶大な影響力を有する海老名弾正と神学論争して、組合教会の自由主義的神学の性格を見抜いていた植村にとっては、組合教会との合同は、危険ではなかったか。合同することによって、教義の正統性が見失われ、教会の純粋性が侵害されることにならないか。しかしこの点において植村は楽観的であった。植村は、特に組合教会出身で当時霊南坂教会を牧していた小崎正道とも親しい関係にあったので、こうした組合派の有力な指導者との関係も合同の推進力であったのではないだろうか。

植村は自ら牧する富士見町教会の牧師であったと同時に、日本基督教会において、1896-1900、1907-1914、1916-1925年まで約25年間「伝道局長」を務めた。この伝道局は1894年に成立した。宣教師の指導を受けない独立した伝道局の伝道局長は、神学校の卒業生をどこの任地に遣わすかの権限をもっており、植村は彼が校長をしていた東京神学社の卒業

生を明治学院の神学部の卒業生よりも優先して、条件のよい所に推薦したという。¹³⁾また伝道局が日本基督教会の伝道方針や計画を決定するので、各地域教会は、その方針に従うことになる。その意味において、植村の教会観はきわめて中央集権的である。植村の自由な国民教会の形成は、国家や外国の宣教師団体からは自由であるといえるが、各地域教会の自由度は制限されていたのではないだろうか。

すでに述べたように「国民教会」の成立は、ナショナリズム的傾向を持って居た。この点について、佐藤繁夫は次のように述べている。

「『国民教会』という言葉を打ち出したことについては、宣教師の支配からの自由ということと結びついて、『日本の国民による、日本国民の教会』の建設は植村の悲願であったからであると言ってもよい。……したがって伝道と言っても、単に個人への伝道ではなく、国民への伝道であり、そしてすでに言ったように、伝道が単に個人への伝道ではなく、教会を建てること、あるいは教会を造ることでもあるとすれば、伝道とは各国民にその国民にふさわしい教会を建てることである。」¹⁴⁾

植村の教えを受けた熊野義孝（1899-1981）は、『日本キリスト教神学思想史』において植村の国民教会に関して、「国家権力に依存せずして国民教会の形成を図り、しかもそれが教派超越的な公同的形態をそなえ、同時にできるだけ自由な体制を持つ活発な伝道的集団であることを望んで居る。そのためには、信者の団結と牧師伝道者の神学的勉勵が当然の養成となる。」と述べている。¹⁵⁾

1.5 霊的共同体としての教会

植村の教会観には、相矛盾する側面があった。植村は目に見える制度的教会の形成に急なあまり、目に見えない霊的共同体としての教会には無関心であったわけではない。彼はこの二つの間で揺れ動いていたのである。植村にとっても、教会が教会であるためには、霊的な教会、つまりキリストが臨在し、聖霊によって導かれる教会は、大前提であった。「目に見える教会」は、「目に見えない教会」の理念によって支えられている必要があった。

植村にとって、教会の第一の目的は「礼拝」にあった。植村は、「上帝の前に額ずきて礼拝を捧ぐ、人類の尊栄これに過ぐるものなし。……吾人は、キリストの道より、造花の内に顕れたる神の栄光を仰ぎ、受肉降生と十字架の死とに顕彰せられしその愛に感じて真実無妄なる礼拝を献ぐることを得べし。」（『植村正久著作集』⑥-241～2）と述べている。

第二に、教会は、信徒たちの交わりの中である。彼は、信徒の共同体である教会をキリストのからだにたとえたパウロの教えを念頭に置いて、「キリスト教徒の交わり」（『福音新報』194号、1899年3月17日）で以下のように述べている。

「使徒パウロは、これ【教会】をもってキリストを首とする肢体の關係に譬え、イエスはまた我は葡萄樹汝はその枝なりと宣給えり。真に彼らは皆一つ霊に在ってバプテスマを受け、一つの身体となり、一つの霊を飲みたるものにして、誰か弱りて我弱らざんや、誰か躓きてわが心熱せざらんや。彼の喜びは我の喜びたり、我の悲しみは彼の悲しみにてあるなり。極端なる個人本位主義は、旧世紀の思想のみ。」（⑥-251）

こうした霊的共同体は、形をとり、制度として建てられていくと植村は考えた。また植

村は、教会における信条を重要視した。彼は教派主義を嫌ったが、キリストの神性、受肉、十字架の贖いと復活の意義を強調した。ただ彼は、それぞれの教会が有している教派固有の信条、例えば、改革派教会の「ウエストミンスター信仰告白」、「ハイデルベルク門答」、「ドルト教憲」などは、教会合同のさまたげになるとして、簡易信条を主張した。

植村は、1906年に『福音新報』（589号、1906年10月1日）に「時代の要求と教会の要求」を掲載し、歴史における教会の役割について以下のように述べている。

「余輩は、教会が社会の一方に覇権を唱え、その中には固い信仰が充ち、健全な道徳が備わって居るため、浮薄な社会がただ勢いに推されて形ばかりのキリスト教に流れていくのを或いは庶り、或いは堰き止め、かくて邪魔になるであろうと信じる。是非こういう地位勢力に致さなければならぬのである。教会はどこまでも骨格である、柱である。」（『植村正久著作集』①-386）

それでは世に流されず、逆に世の流れに警告し、引き戻すことのできる教会とは一体何であろうか、この点につき、植村は以下のように述べている。

「今日の教会は、先ず教会についての理想をしっかりさせ、高いものとさせなくてはならぬ。教会は神の国である。神の充つる所、神の心の遺憾なく行わるる所、イエス・キリストの居ます所、その精神の活動する所。この理想に照らして教会は生きて行き立っても行くべきものである。」（同、①-386）

教会が世の流れに巻き込まれず、世の光となるためには、教会にキリストが臨在し、キリストのいのちに生かされた信者の集まりである必要があった。教会がこの世的な価値観によって支配され、この世的に影響がある人々が支配し、キリストが教会の外に追い出される時に、もはや教会は教会ではなくなるのである。

このように聖書的な霊的教会観を保持しつつも、植村自身の教会形成には問題があった。つまり、国民教会設立のために教会合同を急ぐあまり、信条を簡素化しすぎたのではなかろうか。日本をキリスト教化するためには、国民的な制度化された教会を創設し、それを礎に地上に「神の国」を建設していくことを考えたのではないだろうか。

一時植村正久に師事し、後にルーテル教会に移籍した佐藤繁彦（1887-1935）は、「日本の基督教会の将来」において、植村について以下のように述べている、

「氏【植村正久】は、あくまで教会主義の人であった。氏の神学にリッチェルの影響が著しかったことは、氏の弟子として学んだ余の親しく感知していたことである。氏はまたカルヴァン主義を教会生活において実現しようとした。」（『内村鑑三目録』⑫-401）

アルブレヒト・リッチェル（1822-1889）は、近代の文化の理念を「神の国」思想によみこんだので、この地上は「進歩」することに由って「神の国」を形成できると考えていた。そこには内村の再臨信仰に見られる終末論はみじんも認められない。

1.6 植村の無教会批判

植村は、上述の教会観に立って、内村の無教会運動に徹底して敵対した。彼は、「いわゆる無教会主義などと名づくる輩は、……霊界の乱臣賊子、獅子身中の虫、精神上の病的分子」と攻撃した。更に植村は、無教会に関して、「教会の設立を難じ、自ら一身を快とする

ことのみ汲々として、団体に対する責任を重んぜず、独り退いて神と交わり靈性の修養を務めて、キリストの意を得たりとなすが如きは、大いなる^{ひがごと}非事なりと謂わざるべからず。これ己が智もってキリストに優るものありとなすに等し」（『植村正夫全集』⑥-105）と述べ、「信者は孤立すべきものに非ず。孤立して栄えんこと思いも寄らず。……他より受けず、また他にも与うることを拒絶す。かくの如く傲慢なる精神は、キリスト教の主義に背戻すこと甚だし」と批判している。（同、⑥-106）

更に植村は、内村のピューリタニズムを批判し、「この世界とこれに住する吾が身および他人の地位、性質程度のいかんをも察せず、妄りに理想にのみ走りて教会のうちに玉石のともに混淆するを忌み嫌い、漫然清教徒を気取りもしくは非教会の孤立主義を執らんとするものも、同じく火急躁進の熱疫に侵されたりと謂わざるべからず。」（『植村正久全集』1,893. ①-17）と述べている。

また無教会の洗礼、晩餐否定論に関しては、以下のように批判している。

「世には洗礼も聖晩餐も教会も要らぬと言うものもある。しかもこれは、非常な間違いである。宗教には具体的なものが必要である、殊にキリスト教は個人主義ではないから、多くの物が集まって親しくパンを裂くというようなことがなくてはならぬ。」（同、②-509）

また無教会が靈的な教会を強調するあまり制度化された教会を批判することに対して、「形式的の教会」（『福音新報』6004号、1917, 1, 24）において以下のように述べている。

「世には、無教会など言える主義を唱えて、形式的に組織せる教会を非難するものもある。彼らはキリストにおいて一つなる靈的の教会は認むべきであるが、形式のは取るに足らず、況や個々分立して宗派を成せるものにおいてをやというようである。これは一寸道理あり気に聞こゆるけれど、大いなる間違いである。人類にも目に見えざる靈魂の有ると同時に、これを表わすところの目に見ゆる^{からだ}形骸が着いている。……キリスト教は肉体を重んじる。神の座に座し給うキリストすら復活^{よみがえ}られた体を有って居ると見做すのである。」（『植村正久著作集』⑥-265）

2 植村後の問題

政治学者の京極純一（1924-2016）は、「植村正久－その人と思想」（新教新書、1966年）において、植村以降の日本基督教会の問題点について次のように述べている。

「植村正久は、1925年1月に世を去った。その後30年間の間、日本社会は、無責任と無原理の支配するままに、破滅の道を辿った。……また彼の死の二年後富士見町教会において、また十六年後日本基督教会において、すなわち彼自身にとって実践的に最も重要であった二つの場において、『伝道者』としての植村正久の志向の挫折も否定の余地なく、顕在化した。そして、この二つの周知の事件自体が日本プロテスタンティズム第二期の次第に深まり行く頹落を示す指標であった。」¹⁶⁾

この二つの事件とは、植村死後の富士見町教会の分裂であり、もう一つは1941年の日本基督教団の上からの強制的な教会合同であった。この二つの問題は、底流においては、密接な関係を有していた。

2.1 富士見町教会の分裂

雨宮栄一は、『牧師 植村正久』において、植村正久亡き後の富士見町教会と日本の教会の状況について以下のように述べている。

「富士見町教会は正久亡き後、様々な試練を経なければならなかった。周知のように、牧師招聘を巡って、富士見町教会は二つに分かれる。高倉に指導を仰ぎたいと考えた人たちは、大挙して富士見町教会を去り、当時高倉が牧会していた戸山教会に移籍した。また日本の教会も、昭和という極めて困難な暗い谷間の時代に入り、やがてあの忌まわしい十五年戦争に巻き込まれるに至る。あれほど教会に対する国家の介入を嫌った正久が生きていたら、どのような対応を示しただろうか。今となっては想像できないが、少なくとも、正久なき後の、当時の日本基督教会の指導者が見せたような愚かな態度はとらなかつたであろう。」¹⁷⁾

富士見町教会の分裂は、富士見町教会内部のみならず、日本基督教会内部、ひいては、プロテスタント教会全体に対して大きな影響を及ぼした。1927年5月の『福音新報』の「富士見町教会会員の決裂」の記事に、決裂の結果が「いわゆる無教会主義者らに凱歌を上げしめるような事態に立ち至る」ことのないように願うと書かれていたことに対して、内村は、1927年5月10日の日記において、次のように述べている。

「これは杞憂であると思う。無教会主義者としてクリスチャンである以上、他人の困難にあるのを見て、凱歌をあぐるような事はなし得ない。……われらは震災以来、富士見町教会に引き続いて臨みし不幸に対して凱歌を上ぐる者があるならば、それは自分の如き無教会信者ではなくて、同教会と教派を共にする人たちの内にあるのではないかと思う。それはいずれにしても、主義は主義として、信者は相互の困難に際して、各自の主義に敬意を表しながら相互を助けたきものである。」（『内村鑑三日記書簡全集』④-49）

この思いは真実な内村の思いであり、この時点で内村は教会対無教会という対立構造ではなく、日本の教会の将来の視点から見ていると思われる。しかし、内村の弟子たちにとっては、富士見町教会の分裂は、教会の問題点が余すところなく現れた事件であった。

内村の高弟の藤井武（1888-1930）は『旧約と新約』（89号）に寄稿した「我観現代日本その二」において、次のように批判している。

「俗業に媚び、その後尾に附して不見識なる社会問題に走る教会よ、外国の金を戀うて見苦しくも独立を売る教会よ、靈魂を商品と思ひ誤り、いたずらに数字をあげつらう教会よ、勢力を争い、策略を弄んで神の家を陰謀家の巢窟となす教会よ。たとえば日本最大の教会と称せらるる日本東京富士見町教会において行われた牧師選挙の醜態の如き、あれは何である乎。若し、弁明の辞があるならば、聞かしてもらいたい。」¹⁸⁾

信濃町教会で高倉徳太郎に師事した小塩力（1903-1958）は、『高倉徳太郎伝』において、このような分裂騒ぎが起こる以前に植村が富士見町教会の霊的状况を慨嘆し、あらたな開拓伝道を目指そうとしていたことを証言している。

「まず第一に、このような騒擾が起こり得べき可能性の、富士見町教会内にかもされていた事実である。これを最も敏感に見抜いていたのは、植村正久その人であった。一

個の人間の年齢的制限、永年にわたって形づくってきた交わりの中に拭いがたくあらわれてきた人間中心の精神、したがって植村に全幅の信頼をかけているように見える場合でも、植村がよって生きている福音の真理に聞こうとしなくなっている状態、教会形態の維持が何よりの先決問題と考えられ、牧師は悪しき意味での奉仕者、長老が実質的の主人、この世の知恵と地位が最後にものをいうかの如き不信……信仰団体のこのような動脈硬化が、すでに富士見町教会に瀰漫^{びまん}していたといっはいけないであろうか。植村ほどの深い信仰と、人物の偉大さと、驚くべき人間知と、これら一切を貫くキリストに対する忠節、にもかからず、彼はその晩年に富士見町教会に対して深い絶望を覚えたといいうる。¹⁹⁾(下線部引用者)

一言で言えば、世俗的な関心や名声が支配し、キリストの臨在と聖霊の働きが見失われている「霊的な危機」状態であった。そのことが結果的に、富士見町教会の分裂、更には、1941年の強制的な日本基督教団の成立と国体イデオロギーへの屈服に繋がっていったのではないだろうか。

3.3 教会合同と高倉徳太郎

1923年に結成された「日本基督教聯盟」は、1929年に「神の国」運動という超教派の全国的な大衆伝道を決定し、1930～1933年に組織的な伝道活動を展開した。その時の指導者が『死線を越えて』で有名な賀川豊彦(1888-1960)であり、神の国運動委員長は日本基督教会の富田満(1883-1961)であった。1929年11月6日に日比谷公園内、東京市公会堂で「神の国運動宣言信徒大会」が開催され、小崎弘道、井深梶之助、海老名弾正、富田満、賀川豊彦たちが登壇している。

しかしこの運動に批判的であったのが、植村の弟子で、信濃町教会を牧する高倉徳太郎であった。高倉は、植村正久の後を継いで「明治学院神学部」と「東京神学社」を合同した「日本神学校」の事実上のリーダーであった。この点に関して、雨宮栄一は『暗い谷間の賀川豊彦』において次のように述べている。引用が長くなるが重要な個所なので、紹介したい。

「高倉は当時の日本基督教会の良き指導者であったし、また神学的なオピニオン・リーダーであった。それにこの昭和五年というと、当時の日本基督教会に飽き足りない思いを抱いていた志ざしある青年牧師たちが、高倉を中心として、『福音同志会』なる集団を結成した年でもある。高倉を初めとして、この人たちはいままでの日本基督教会に対してかなり批判的であったのである。その最たる理由は、当時の日本基督教会を束ねていた『実践的なパイエティズム』であった。要するに伝道のためなら、信仰の内実を問うよりも、幅広い信仰理解を許容してゆこうという姿勢であったのである。そこにはごく大まかに言って一応『福音主義』と呼称する立場の内実は、さまざま神学的立場の複合体であったことは否定できない。」²⁰⁾

雨宮は、『信濃町七十五年史』を読み解きながら、高倉徳太郎たちが、基督教会や超教派の「神の国」運動に批判的であった理由を二つ挙げている。一つは、先述したように信仰箇条を最小限にして伝道する「実践的なパイエティズム」批判であった。高倉は教会にお

いては質よりも量が優先されると、キリストの十字架の贖罪の真理や聖霊の導きによる交わりが見失なわれる危険性を憂えた。第二点は、高倉徳太郎が、「神の国運動」における「神の国」の概念に関して、「神の国運動」の進歩主義的な、外面的な「神の国」概念に対して、その終末論的・恩寵的性格を強調した事である。彼にとっては教会において質的に「神の国」= 神の支配が実現されているかが重要であった。高倉は信濃町教会の献堂式の説教（1930年11月12日）である「神の国と教会」において、以下のように強調する。

「要するに教会の問題は、量にあるのではなく、質にあるのである。信濃町教会の献堂を祝う友よりの手紙の一節に「信濃町教会の将来が『大きな教会』となるよりは、『真実の教会』としての成長を切に祈ります」とあった。わが志にふれたる辞として感謝した。教会はいくら量において増したといっても質において失敗ならば、始めからやり直すべきものと信じる。現代の祖国において神の求めたもう教会は、分量においてではなく、信仰の素質において純なる教会であると思う。キリストの十字架の贖罪の真理に立って、内なる交わりがなされ、妥協なき福音においてのみ伝道が励まるる教会に神の国は託されている。」²¹⁾

また高倉徳太郎は、内村鑑三と同じ再臨信仰を抱いていた。彼は「来たり給う主を待つ」（1933年4月）という説教の中で、「主の来たりたもうは必然であり、また忽然としてである。その日、その時を知らざる我らは、毎日毎日、各瞬間瞬間来たり給うことを信じて、目を覚まして待つべきである。」²²⁾と述べている。

十字架の贖罪信仰と再臨信仰を保ち、霊的で純粋な教会を求める点において、高倉は、内村鑑三に限りなく接近しているといっても過言ではない。

植村亡き後の富士見町教会は、しばしば賀川を招いて、伝道集会を行った。高倉にとつて、「当時の日本基督教会が中心になって、神の国運動を起こし、百万人伝道を主張する体質こそが、問題だったのである。」²³⁾

要するに、高倉が目指したものは今まで植村が展開してきた教会合同と、大規模な大衆伝道路線の否定であり、霊的な神の教会を建て上げようとする試みであった。しかしこうした異議申し立ては、1935年の高倉の自殺によってストップし、1941年の上からの教会合同によって、国体の一翼をになう日本基督教団が形成されるのである。

3.4 基督教団の成立

歴史的には教会の合同は、1939年4月に「宗教団体法」の制定に基づき、1941年6月に富士見町教会で開かれた教団創立総会において日本基督教団が結成された。その統理者として富田満が選ばれ、以降教団は国策に従い、教会で礼拝中に宮城遙拝、国家斉唱、武運長久祈禱を行った。もしこの時、植村正久が生きていたとするならば、彼はこうした強制的な合同にどのような態度をとっていたであろうか。彼がこうした合同を批判したであろうことは想像に難くない。しかし他方、植村が努力してきた教会合同の試みが、強制的な上からの日本基督教団の成立の下準備になったといえないだろうか。富田満は、日本基督教団合同以前の日本基督教会代表の合同の準備委員に熊野義孝（1899-1981）、三吉務（1878-1975）、佐波亘（1881-1958）、浅野純一（1891-1981）などととも選ばれていたが、植村の

後継者として、教会合同を推し進め、日本基督教団の初代統理に就任したのである。

1925年の植村正久の死、そして1934年の高倉徳太郎の死によって、日本基督教会は、霊的リーダーを失い、歴史の激流に飲み込まれていくことになる。

注

- 1) 関根正雄編著「内村鑑三」(清水書院、1988年)、100頁。
- 2) 政池仁『内村鑑三伝』(再増補・改訂新版)、1977年、教文館)、67頁。
- 3) 同上、327頁。なお内村が無教会という言葉を最初に使ったのは『基督信徒の慰め』(1893年)においてであった。
- 4) 関根、前掲書、3108頁。
- 5) 矢内原忠雄『内村鑑三と共に』(新装版、東京大学出版会、2011年)、476～8頁。なお内村の無教会観については、宮田光雄の「無教会運動の歴史と神学」(『日本キリスト教思想史研究』(創文社、2013年))を参照の事。
- 6) なお内村は、教会の慈善活動には否定的であったが、フランス領赤道アフリカのランバレネで医療活動をしていたアルベルト・シュヴァイツァー(1875-1965)に幾度か献金を送って、シュヴァイツァーから感謝状を受けている。また内村は熊本でハンセン病患者のために回春病院を建てた英国の宣教師ハンナ・リデル(1855-1932)の働きを支援した。
- 7) 山本泰次郎「内村鑑三の根本問題」、95頁。
- 8) 塚本虎二『去思と望憶』、1979年、441頁。
- 9) 同上、451頁。富士見町教会の分裂に関しては、『富士見町教会百年-文集・年表』(富士見町教会、1987年)に記載されている清水護「教会の分裂問題について」(75～90頁)を参照の事。そこに富士見町教会における植村正久牧師の後継者として高倉徳太郎を支持し、結果的に富士見町教会から分離した人びとの声明書(訣別の辞)が記されている。「福音的信仰を体得して深い神学を背景とし、常々進撃的奮闘を続け、預言者的熱誠を以て獅子吼すると同時に、一人一人の魂のために細やかな注意と熱い愛を惜しまない高倉先生こそ富士見町教会の後任牧師として最も適任であると考え、福音的信仰に依って志を同じうする兄弟姉妹の集団を別に形成し、以って各自の信仰生活を徹底せしめて行くより外に道がなくなりました。」(80頁)
- 10) 内村以降の無教会論の展開については、無教会論研究会編『無教会論の軌跡』(キリスト教図書出版、1989年)を参照。
- 11) 政池仁『内村鑑三』(教文館、1977年)、359頁。
- 12) 鳩沼裕子「日本基督教史」(聖学院大学出版会、1997年)、47頁。
- 13) 佐藤敏夫『植村正久とその弟子たち』、(新教出版社、1999年)、117頁。
- 14) 同書、73頁。
- 15) 熊野義孝「日本基督教神学思想史」(新教出版社、1968年)、236頁。
- 16) 京極純一『植村正久-その人と思想』(新教出版社、1984年)、165頁。
- 17) 雨宮栄一『牧師 植村正久』(新教出版社、2008年)、351-352頁。
- 18) 小塩力『高倉徳太郎傳』(新教出版社、1954年)、220頁。
- 19) 小塩力、前掲書、224-225頁。
- 20) 雨宮栄一『暗い谷間の賀川豊彦』(新教出版社、2006年)、146頁。なお高倉徳太郎の生涯については、雨宮栄一『評伝高倉徳太郎(上)(下)』(新教出版社、2010年、2011年)を参照。
- 21) 『日本の説教8 高倉徳太郎』(日本キリスト教壇出版局、2003年)、149-150頁。
- 22) 同上、233-234頁。
- 23) 雨宮、前掲書、147頁。

参考文献

- 1 内村鑑三『内村鑑三全集』（岩波書店、全 39 巻）
- 2 内村鑑三『内村鑑三日記書簡全集』（全 8 巻）（オンデマンド版、2005 年）
- 3 鈴木範久『内村鑑三目録 12 1925-1930、万物の復興』（教文館、1999 年）
- 4 関根正雄編著「内村鑑三」（清水書院、1988 年）
- 5 雨宮栄一『若き植村正久』（新教出版社、2007 年）、『戦う植村正久』（2008 年）「『牧師 植村正久』（2009 年）の三部作
- 6 『植村正久著作集』（1 - 7 巻、新教出版社、1966 年）
- 7 『植村正久全集』（1 - 8 巻、植村全集刊行会、1933 年）
- 8 小塩力「高倉徳太郎傳」（新教出版社、1954 年）
- 9 高倉徳太郎「日本の説教 8—高倉徳太郎」（日本キリスト教団出版局、2003 年）